



文部科学省
IB教育推進コンソーシアム

TEACHER TESTIMONIAL



市川未来氏（私立 若草幼稚園）

2021年にIB校に認定された幼稚園（園長は隣接するお寺の住職）の年少学年主任。
候補校期間やその前の導入を含めIB教育の実践歴は6年。

「子ども達のわくわくを大切に、一人一人の学ぶ力やコミュニケーション力を培っていく」

子ども達への言葉がけで子ども達が変わってきた

園長先生から「国際バカロレア」のお話をお聞きしたのがきっかけでIB教育を知りました。「IB教育をやるぞ」ではなく、「こういう素晴らしい教育方法があるんだけど、どう思う？」という問いかけでした。その後、当時担任だった全職員でIBの実践園へ何度もお邪魔し、お話を聞かせていただくところから導入が始まりました。

少しずつIBの手法を取り入れていくと、子ども達も一緒に考えるという場面が増えていきました。以前は、みんなで一緒に折り紙を折ろうとか、みんなで決まった題材の絵を描こうなど、教師が計画した活動が多かったのですが、「何を作りたい？」という選択を促す問いかけや、「どうやったらできるかな？」という子ども達への言葉がけで子ども達の変化を感じられる投げかけ方を取り入れるようになりました。それに応じて子ども達自身も変わってきた、と実感するようになりました。

IBの教育を展開していく中で心掛けているのは、子ども達がわくわくするような「やりたい！」「楽しそう！」「なんでだろう？」と思ってくれる環境設定です。子ども達は色々なものに興味があり、「次どうしようか？」「何してみよう？」と問いかけると、「これやってみたい！」「なんでこうなんだろう？」と、すぐに様々な反応を返してくれます。言葉がけの効果は大きく、今はそんな子ども達から声をもらって活動を進めることが増えました。

基礎の基礎から積み上げて、年長になったときには自分で考えて選択し行動できる力を培う

年少は基礎の基礎です。お家から離れて初めての集団生

活をする子どもが多いので、まずは幼稚園を知るところから始めます。「幼稚園はどんなところだろう？」がそのまま探究活動になります。みんなで園内を探検し、「色々な教室がある」「色々な先生がいる」「違った形のお部屋がある」ということに気づきます。また、実際にその場所に行き、「ここで何をするんだろう？」「どうやって使うんだろう？」と子ども達と想像したり、体験しながら学びます。自分の居場所が分かると、人との関わりへスムーズに移行できます。

こうしたごく初期の探究活動で私が心掛けているのは、子ども達の声の聞き取り方です。いきなり自由に選んだり考えてよいと言われても、問いの意味自体が分からず子ども達は不安に思います。ですから、出来るだけ小さな選択から始めます。最初は二択、次は三択というようにし、選択肢をだんだん増やすようにしています。その経験が積み上げられ、年長になった時には、「これもあるし、あれもあるし、どれにしよう」と自分でより広範囲の選択肢を見つけるようになり、自由に選べるようになっていくと思っています。

IBの学習者像は幼児教育の中でもとても大切なものがあり、分かりやすい道標を作ってくれます。若草幼稚園は、仏教の教えを大事にしている幼稚園で、人とのつながりや思いやりの心を大切にしています。人とのコミュニケーション、心を開くこと、思いやりのある行動、自分で考えたことを最後までやりぬくことなど、具体的な行動について話をする時はこの学習者像がとても役立ちます。今、クラス内にはIB学習者像のポスターが貼られていますが、子ども達は常日頃からそこに書かれている言葉を見ており、活動の振り返りをする時などには「これはCaring（思いやりのある人）だね」と的確に意味を理解して発言する

ようになりました。

教員として変わった点は、様々な協力体制ができたという事です。これまで学年毎のミーティングはあったものの、それ以外の先生と集まって話す機会は滅多にありませんでした。それが I B の推奨する協働ミーティングを取り入れたことにより、学年横断だけでなく、園全体でのミーティング、英語や体操といった専科の先生とのミーティングなど、状況に応じて様々な相談が出来るようになりました。子ども達の姿が共有でき、異年齢に連続する計画を立てたり、ユニット活動を一緒に進めたりします。「日本語のクラスではこれをやるので英語のクラスではこれをお願いします」というように、複数言語でも一貫したつながりができ、子ども達の興味もつながっていきます。

子どもの興味が自発的な学びへとつながっていく

多くの保護者から前向きなフィードバックをいただいています。幼稚園でやったことを家に帰って楽しそうに話したり、それを家で実践したりしたという声をききます。以前、年長クラスで子ども達と仕事探しの散歩に出て、いろいろなお店や、道路で働いている人、郵便屋さんなどを見つけた時には、保護者から「子どもに仕事探しの散歩をしよう」と誘われ、一緒に探しました。」「パパに仕事についてインタビューしました。」「子どもが自分で意欲的に学ぼう、聞こう、考えようとする姿がすごいです。楽しそうです。」といったお話も伺いました。

I B で学んできた子ども達は小学校に上がってからも意欲や探究心があり、学校活動に積極的に取り組み、友達とのコミュニケーションもうまく取れているようです。小学校の先生からは「以前の若草幼稚園の子どもは、おりこうなんだけど、どちらかというと指示待ちで、『これやっていいの?』と聞く子が多かったが、今は主体性があって、自分で行動したり、人に声をかけてみたり等ということが増えてきた」という評価を聞いています。ただ、自分で好きなものを選んで探究するということにまだ対応されていない小学校もあり、「是非、園長先生と一緒に小学校を作ってください」と言ってくださる保護者の方々もいます。

探究活動はペア、グループ、クラス全体など、様々な友達関係の中で行われるので、他の人との関わり、特にコミュニケーション能力はしっかりと育成されてきたのではないかと感じます。人に伝える、人の話を聞くといった基本的なところですが、両面について成長が見られます。先日も見学に来られた他園の先生にお褒めいただきまし

た。ちょうど積み木でタワーを高く積む競争をしていた時間で、チームで考えた作戦を互いに発表し合っていたのです。そういう人前で話をする場面で、モジモジしてもおかしくない年少児が堂々と自分の考えを話し、他の子どもがみんな集中して聞いていて驚いた、とおっしゃいました。ずっと一緒にいる担任としては気づきにくいところですが、とても嬉しかったです。I B 教育を始めてからコミュニケーション能力の大切さを感じてきましたので、その感想は本当にありがたいことでした。

先生も子ども達と一緒に色々な体験をして
楽しみながら共に成長できる教育
今までの学びを楽しそうに語れる教育を
仲間とともに実践していきたい

私自身、子ども達と一緒に色々な体験をして成長していきたいという願いがありました。そういう意味でも、一歩前に踏み出せた気がします。I B の資料は英語のものが多く、初めは何が何だかわからない状態でしたが、誰かに言われたからやるのではもったいない。自分が経験して切り開いていこうと思いました。

そう思えたきっかけは、実際に色々な I B 校を見に行き、大変多くの良い刺激を受けた事です。先生たちの姿ってやっぱり大きいと思います。その先生が子ども達とすごく楽しそうにしている、「先生が楽しそうにしているのっていいな」と思いました。先生がそれまでの学びをすごく楽しそうに話してくれ、「あぁいい教育なんだ」、「私たちもそういう教育をやってみたいな」と思うようになったのです。

最近は私たちの園にも他県の幼稚園や小学校の先生が見に来られるようになりました。I B の学びをお話する機会が多くなり、そのたびに私たち自身も振り返ることができて嬉しく思っています。今後は多くの先生方と交流したり、互いを訪問し合ったり、共にワークショップや研修をしたり、困った時には連絡を取り合えるようなコミュニティが出来たらいいな、一緒に学び合えたらいいなと思っております。

